

「คง (khong)」は「ダロウ」か？ ——翻訳に現れる推量表現の考察——

Siratsanan KIATKOBCHAI

0. はじめに

「明日雨が降るだろう」をタイ語に訳すと「พรุ่งนี้ฝนคงตก (phrûngnîi fôn khong tòk)」のように訳され、ダロウは คง(khong)と解釈されることが多い。そのため、คง(khong)のことをダロウと同様だと思うタイ人日本語学習者が少なくないだろう。しかし、小説等では、คง(khong)がダロウに訳されていない場合が見られる。それは、คง(khong)とダロウの性質に違いがあるからだと思われる。คง(khong)は日本語でどのように翻訳されているか、どのような用法を持っているか、ダロウと คง(khong)が対応しない部分はどこかを明らかにするのが本研究の目的である。

以下、まず1.でダロウの先行研究を確認した上で、本稿の立場を述べる。次に2.で คง(khong)の先行研究を概観する。3.では、現代小説をデータとして使用調査を行ない、คง(khong)に対応する日本語の表現の実態を見つつ、ダロウに対応する คง(khong) (3.1) とダロウに対応しない คง(khong) (3.2) について考察する。4.で先行研究と分析を踏まえながら、คง(khong)の用法を述べる。5.で結論をまとめる。

1. 推量表現のダロウ

「だろう⁽¹⁾」には様々な用法があるが、本稿が対象とするものは推量表現のみであり、「確認用法」(1)や「疑念用法」(2)などの用法については、対象としない。(cf. キャアコップチャイ スィラッサン 2010)

(1) 「さっき電話で週末はいそがしいだろうといっていたでしょう？」

(2) 自分の全体重がスライドする浮遊感、何年ぶりだろう。

1.1 先行研究

ダロウの研究は数多くあるが、奥田(1984, 1985)はダロウを既知的な事実、判断からの推論と特徴づけて、ダロウの推量の機能を「おしはかり」といい、経験のなかにすでに確認されている事実、あるいはすでに証明されている判断をよりどころに、そこから想像あるいは思考によってあらたにひきだされる出来事をえがきだしていると述べている。

寺村(1984:229)は、ダロウは話し手自身の発話時点での心の状態の直接的表現であると捉え、「その根拠が自分個人の知識や経験だけによる場合で、その点で結局は確言的な断定のダと大して変わらない」と主張している。益岡(1991:112)もダロウは当該の真偽判断が表現者個人の判断であるという限定を付するところに特徴があり、「私的な判断」とであると明示している。ただし、益岡(1991:同頁)では、「断定表現になることを避けるわけである」とし、第一義的にダロウは断定保留を表すとも述べている。

日本語記述文法研究会編（2003：148）では、推量とは、想像や思考によって、その事態が成立するとの判断を下すことであると述べている。

宮崎（1994、2005）は心理的領域の観点から「話し手の直接経験的領域にない知識」についてより詳しく説明している。ダロウによる推量表現が用いられる心理的領域というのは、話し手が経験や知識によって直接的に把握しえない領域であり、思考、想像、仮定といった概念的に構成した情報は、談話処理においては、その領域に属する情報として扱われる、との仮説が立てられ、ダロウは話し手領域にない情報を指示する語用論的要素であると仮定されている。

三宅（2010：11）は、「推量」のダロウを「話し手の想像の中で命題を真であると認識する」と定義する。安達（1999：197）は奥田氏および三宅氏の考えを受け、ダロウは話し手が既存の知識から推論し、ある命題を想像として設定したことを表していると述べている。

1.2 本稿の立場

用語は多少異なるが、先行研究ではダロウによる推量表現を話し手の領域にない情報で、思考、想像によるものとして捉えるのがほとんどである。本稿も同じ立場で、日本語記述文法研究会（2003）および宮崎（1995、2005）に基づいてダロウの概念を「話し手の直接的経験領域にない知識について、思考、想像、仮定という不確かな認識によって判断を下す用法である」と捉える。

また、寺村（1984）の言う「ダロウは主観性の強い表現」と、益岡（1991）の言う「断定保留」については、話し手が、確信度は高いが断定は控える、という態度をとる場合と考え、推量表現の表現効果であると捉える。回答として使われることもしばしば見られる。（cf. (7)）

(3) 夜更かしの母は多分隣の部屋で本でも読んでいるだろう。 (猛)

(4) これが光子との結婚を仲間たちに報告するためのめでたい席でなければ、三十歳を目前にしたこの旺盛な年頃に、会費だけで終わることはなかつただろう。 (サヨナラ)
推量表現のダロウは地の文だけではなく、対話にも用いられるが、数は少ない。

(5) 「それで、おれがやるのはどんな仕事なんですか」

「ぼくの使いであちこちの金融機関へ出むいてもらったり、資料を集めてもらったり、まあケースによっていろいろだ。最初の三カ月ほどは 트레이ニーとして研修してもらうことになるだろう」 (波)

聞き手の存在を考慮する場合、性別や上下関係等による位相差があるため、ダロウと「でしょう」の使い分けが見られる。さらに、「でしょう」を用いる場合、丁寧な表現となり、相手を尊重するという意味が生じる。従って、話し手が直接に知り得ない聞き手の感覚・感情・判断等の事柄に触れる際、「でしょう」を使うことによって、聞き手に配慮しながら話し手の考えを述べることもよくある。

(6) 「ご存知でしょうが、市場の空気は変わり身が速い。」 (波)

(7) 「最終期限はいつごろとお考えですか」

「政府のやることはさっぱりわかりませんが、十月か遅くとも十一月には法案は可決されるでしょう」(波)

推量表現のダロウはいわゆる C 類⁽²⁾の接続助詞「から」「し」「が」「けど」などの前にもよく現れるが、A 類・B 類の接続助詞の前には出現しない。

(8) きっとこの手紙はあなたを煩わせるだけでしょうから、迷わず破棄なさることをお勧め致します。(サヨナラ)

推量は基本的に話し手自身の中で行われることが多い。いわゆる地の文に用いられるものであるため、推量表現ではダロウが用いられるのが基本である。ただし、対話の場合は、「でしょう」という形式が用いられることが多い。なお、「でしょう」は庵 (2009) でも述べられているが、天気予報などでも使われるように、<上>から<下>、つまり、情報の所有者から非所有者にむかって発せられるケースが多い。

2. ฅง(khong)についての先行研究

「ฅง(khong)⁽³⁾」という形式は助動詞として推測するという働きを持っている他に、「～ている」という進行を表す働きもある。いずれの場合も「助動詞+動詞」の形をしているため、「推測」であるか、「進行形」であるかは形だけでは判断できず、意味上で判断するしかない。そこで、本研究では、意味から判断をしたうえで、推測の用法のみを扱うことにする。

ฅง(khong)をテーマとして取り上げた研究論文は管見の限り、見当たらないが、古くからのタイ語の原理に触れた Upakitsilpasaan(1968)によると、タイ語には mala (ムード) が 5 つあり、ฅง(khong) は内容を認識するムード(sakdimala)としている。タイにおけるムード・モダリティについて述べた Phornthip Phatrannawig (1972)では、mala を 12 種に分けており、ฅง(khong)は推量を表すムード (malakhatkhanee) と分類される。また、Suda Rangkupan (2005)は、タイ語における認識モダリティについて研究しており、推量する機能を持っている形式の中で、ฅง(khong)が一つの形式として取り上げられている。Suda (2005) では、ฅง(khong)を preverbal auxiliaries (動詞の前に付加する助動詞) とし、推測を表す表現における分類の中で ฅง(khong)が用いられるのは Probability (蓋然性)、Counterfactuals (反事実)、Indirect evidence (間接的な証拠) の 3 つに分類し、以下のように説明している。Probability は、話し手はある事柄が真であること、または未来に真になることを高い確信度で断定し、主観的に物事を推測するという表現である。更に、未来における自分自身の行動を推測する場合もある。Counterfactuals は、話し手は過去の出来事を事実と反対だと認識しているものの、それが条件に従っていれば実現できた、という表現である。Indirect evidence は、推測するのに使う情報が話し手自身が直接体験したものではなく、知覚による証拠 (perceptual evidence) の場合である。話し手が直接に知り得ない聞き手の感覚・感情・判断等の事柄に触れる際にも用いられる。また、談話機能について ฅง(khong)が用いられる用法も三つ指摘している。一つは、argumentation のポライトネス用法であり、論争中に争いを避ける表現であ

る。後の 2 つは、談話上の構造における用法で、話し手自身が会話を締めたい時に用いられる closing a conversation と、発話時点における聞き手の感覚・感情を通じて聞き手または読み手の注意を引く hearer-appeal があげられている。Suda (2005) に関しては、4. ฅง(khong)の用法で詳しく見たい。

3. ฅง(khong)に対する日本語の表現の使用数・割合と分析

本研究では、ฅง(khong)に対応する日本語の表現の実態を把握するために、1984 年以降に刊行されたタイ語の小説 5 作品とその日本語翻訳版を対象としてタイの小説で用いられた ฅง(khong)文を抽出し、翻訳版でそれらの ฅง(khong)がどのように翻訳されたのか、どのぐらいの割合なのかを調査した。

3.1 調査の結果

表 1 ฅง(khong)の作品・訳された表現別使用数

作品	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	合計
インモラル	23	10	3	1	6	0	7	4	4	2	1	1	0	62
鏡	7	8	1	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	21
蛇	21	18	2	0	4	2	2	0	2	1	1	0	1	54
ヨム	11	4	0	0	2	6	0	7	0	0	0	0	0	30
私	113	25	10	1	1	6	0	3	1	1	1	0	0	162
合計	175(53%)	65(20%)	16(5%)	2(1%)	17(5%)	15(5%)	9(3%)	14(4%)	7(2%)	4(1%)	3(1%)	1(0%)	1(0%)	329

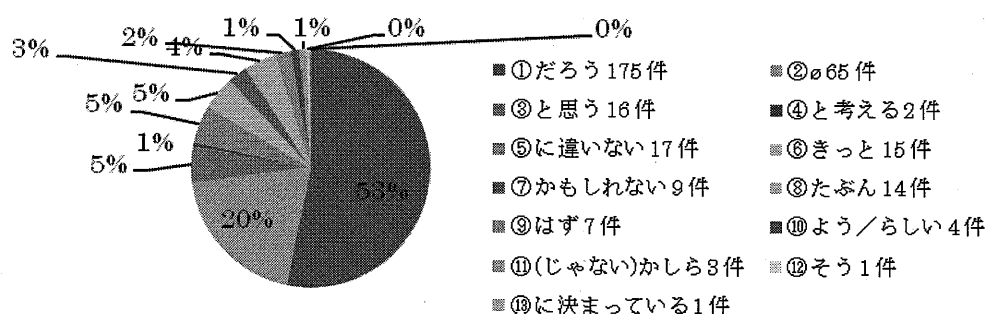


図 1 ฅง(khong)に対応する表現の使用数・割合

5 作品中の ฅง(khong)の出現数は 329 例である。図 1 に示すように、ダロウが半分以上を占める (ダロウに対応する ฅง(khong)は、3.2 で後述) が、100%使用されていないことも確認できた。この結果により、ฅง(khong)はダロウと同じではないといえよう。ダロウに対応しない ฅง(khong)を調べることによってタイ語研究では見落とされていた ฅง(khong)の用法が明らかになった (詳細は 3.3 で述べる)。

3.2 ダロウが対応する คง(khong)

คง(khong)は、ダロウと同様に推量表現として使われている。本稿では、คง(khong)を「主観的な推量」(9)と「間接的な証拠からの推量」(10)に分ける。คง(khong)とダロウいずれも地の文と会話の文に用いられる。ただし、ダロウにおける間接的な証拠からの推量の場合、説明モダリティの「ノ」が共起する。さらに、ダロウは聞き手の存在が考慮され、性別や上下関係等の位相差による「でしょう」との使い分けが見られるが、คง(khong)にはそういったことはない。

(9) คง ช่วย คน พวกนั้น ได้ บ้าง (khong chuâi khon phûaknân dai bâang)

助ける 人 それら できる 多少

あの親子にはそれで多少の生活の足しにはなるだろう。(インモラル)

(10) คง กลัว ยาย เลย ไม่ กล้า ให้ อุ้ม (khong klua yaay læy mâi klâa hai ôm)

怖がる 祖母 だから NEG 勇気がある させる 抱く

おばあさんが怖くて、抱かれたくなかったのでしょう。

(ヌンは口をゆがめて泣き出し、ガーム姉さんの胸にすがりつきました。)(私は)

3.3 ダロウが対応しない คง(khong)

ダロウが対応しない คง(khong)は半分以下とはいえ、47%も占めているので、確認することが必要である。ダロウに次いで多くを占めているのは、คง(khong)に対応する形式のない「Ø」⁽⁴⁾であり、その割合は20%であった。なぜほかの認識モダリティの推量や確信の度合いを表す副詞に翻訳されていないのか、どのように訳されたのかをまとめると以下の5点が指摘できる。

1) 一人称制限: คง(khong)とは異なり、ダロウには(11)のように、一人称主体が来にくい場合がある。日本語記述文法研究会(2003: 148)では、「推量の対象となるのは、話し手にとって本来知りえないことであるので、不確かなことであっても、話し手の記憶の中にある事柄や話し手自身の行動予定にダロウを用いることは自然ではない。」と述べている。

(11) 急いでいたので、エアコンを切らずにきた {かもしれない／? だろう}

(12) ผม คง ช่วย ทุก คน ไม่ ได้ หรือ (phôm khong chuâi thúk khon mâi dâi ròi)

僕 助ける 全て 人 NEG できる PART

全員を助けるなんて無理だよ。(インモラル)

2) 断定扱い: 話し手の独断な判断の場合、ダロウも用いられるが、断定形に翻訳されることもしばしばある。

(13)	เขา	คิด	ความว่างเปล่า	ความซ้ำซาก	ซึ่งมันเถอะ
	(kháw	khîit	khwaam wâangplâw	khwaamsâmsâak	châng mam thê)
	彼	思う	空虚さ	繰り返し	どうでもいい

มัน คง อยู่ ไม่ นาน หรือ มัน ต้อง ผ่าน ไป เหมือน ชีวิต
 (mam khong yuu mâi naan ròok mam tǔng phàan pai mǔan chiiwít)
 それ 居る NEG 長い PART それ AUX 通る 行く 同様 人生
 彼は思った。空虚さも、飽き飽きするような繰り返しも気にするな。それも長くは
 居続けられやしない、過ぎゆくのが定めだ。 (ヨム)

3) 望み：話し手が願っていることを表現する際に「หวังว่า+คง(khong)」がよく用いられる。

(14) หวัง ว่า ด้อย คง พบ คุณ มา ใช้ ชีวิต ใหม่ ที่ เยอรมัน อย่าง มี ความสุข
 (wǎng wâa tǔy khong phóp khun maa cháai chiiwít mài thîi yœeraman yàang mii khwaamsùk)
 望む と トイ 会う 貴方 来る 使う 人生 新しいで ドイツ よう ある 幸せ
 あなたがドイツへ来られて幸福な人生に遭遇されることを願っています。 (私は)

4) 相手への願望：聞き手への願いや謝罪を表す際、「คิด(หวัง)ว่า+คง(khong)」が用いられる。「คิด(หวัง)ว่า」が省略されることもある。

(15) กระผม คิด ว่า หลวงพ่อ คง เข้าใจ เจตนาดี ของ กระผม
 (kràphǒm khít wâa lǔangphǔw khong khâwcai jeetanadii khǔwng kràphǒm)
 わたくし 思う と 本尊 理解 善意 の わたくし
 わたくしはご本尊様のご理解をいただけるものと思っております... (蛇)

5) その他：ダロウの一人称制限や翻訳者の個人的な訳し方により、別の表現が用いられることもある。

(16) ผม คง นอน ไม่ หลับ ไป ตลอด ชีวิต แน่ ถ้า รู้ ว่า มัน ยัง ไม่ ตาย
 (phǒm khong noon mâi lǎp pai talòt chiiwít nǎe thâa rǔu wâa man yag mâi taay)
 僕 寝る NEG 眠る 行く 永遠 人生 きっと もし 知ると あれ まだ NEG 死ぬ
 ぼくは絶対に、一生、安眠できない気がする。あの犬が生きているか死んだのかを
 確かめるまでは (インモラル)

「と思う」(17)、「と考える」のほかに、「に違いない」等の認識モダリティや、「たぶん」「きっと」の確信の度合いを表す副詞による場合は27%であった((18)～(20))が、数翻訳者の個性による部分もあるので、詳細な考察は今後の課題としたい。

(17) แม่ คิด อยู่ ตลอด เวลา ว่า คง จะ ไม่ มี โอกาส เห็น หน้า เอง แล้ว
 (mêe khít yuu tàlòt weelaa wâa khong cà mâi mii ookàat hǎn nâa eeng léew)
 母 思う いる ずっと 時間 と NEG ある 機会 見える 顔 君 PERF
 二度とお前の顔をみる機会はないって思ってたんだよ。 (蛇)

(18) ถ้า ฉัน พุด เรื่อง ลำบาก ตอน เกะ อยู่ หลาย ปี เขา คง หัวเราะ กัน แน่
 (thâa chán phûut rwâung lambàak toon kê yuu lǎay pii khâw khong hûaró kan nǎe)
 もし 私 言う 事 苦労 時 彫る いる 沢山 年 彼ら 笑う 互い 確か

俺が彫っていた何年間もの苦勞話したら、彼らはきっと滑稽な笑いぐさにするに違いない。

(ヨム)

- (19) นี่ ถ้า ฉัน ไม่ ต้อง ไป โรงสตัฟ ก็ คง ได้ ทำ เต็มที่
(nîi thâa chán mâi tōng pai roongsatát kōw khong dâi tham tem thîi)
これ もし 私 NEG AUX 行く剥製所 CONJ できる する 存分

これで剥製所へ行かずにすめばきっと存分にできる。

(ヨム)

- (20) ผม ข่ม กราม แน่น คง ไม่ มี วัน ตอบ คำถาม เหล่านี้ ได้
(phǒm khòm kraam nêen khong mâi mii wan tòp khamthâam làwnîi dâi)
僕 押し付ける 奥歯 しっかり NEG ある 日 答える 質問 それら できる
わたしは奥歯にぐっと力を込めた。だがこの問いに答えることは簡単にできそうにない。

(インモラル)

4. คง(khong)の用法

本研究では、คง(khong)をダロウと同様に「話し手の直接的経験領域にない知識について、思考、想像、仮定という不確かな認識によって判断を下す用法である」と捉える。その上で、คง(khong)の基本的な用法を「Probability」(本稿では、主観的な推量と呼ぶ。cf. (9))と「Indirect evidence」(本稿では、間接的な証拠からの推量と呼ぶ。cf. (10))とすることにした。Suda(2005)でいう「Counterfactuals」(反事実)については(21')のように、คง(khong)がなくても、反事実的条件文によって反事実という意味が生まれる。(21)ではคง(khong)が推量として用いられているにすぎない。

- (21) ถ้า อนุญาต ให้ มี ก็ คง มี ไป แล้ว
(thâa anúyâa hâi mii kōw khong mii pai léew)
もし 許す ように 持つ CONJ 持つ 行く PERF

もし持つことが許されるんだったら、もう持っているだろう。

- (21') ถ้า อนุญาต ให้ มี ก็ มี ไป แล้ว
(thâa anúyâa hâi mii kōw mii pai léew)

もし持つことが許されるんだったら、もう持っている。

また、推量という基本的な用法のほかに、คง(khong)は談話上の派生的な機能を4つ持つ。

1) 「断定回避」: Suda (2005) では argumentation と hearer-appeal がそれぞれポライトネス用法と談話上の構造における用法としてあげられている。それに対して、筆者は銅直信子 (2001: 60) の指摘、すなわち「当該の情報を話し手が独占していないように表現するのは、相手の positive face の意識を満足させるポジティブ・ポライトネスである。」を受け、それらを「断定回避」と呼び、話し手による断定を避けるという機能として捉えたい。

Suda (2005) で言う argumentation の場合(22)、คง(khong)は、当該の内容があくまでも話し手の意見であって、否定できない事実ではないということを述べる「断定回避」の意味を表している。また、Suda (2005) で言う hearer-appeal の用例(23) (24)も同様に、相手による感情・感覚を述べる際、相手の感情・感覚がわかりかねるため、断定を控えるということを表している。

- (22) ถ้า ต่าง คน ต่าง แรง เข้าหา กัน ทุกคน เป็น ใหญ่
 (thâa tàang khon tàang rɛɛŋ khâw hǎa kan thúk khon pen yài)
 もし 違う 人 違う 激しい 向き合う 互い 全員 COPU 大きい
 ก็ คง อยู่ ด้วยกัน ไม่ได้ ครอบครัว คง ไม่อบอุ่น
 (kǎw khong yùu dûaikan mâi dâi khrǎwpkhrua khong mâi òpùn)
 も 居る 一緒に NEG できる 家族 NEG 温かい

もしみんなそれぞれ自分が偉いと思って、激しい言動をぶつけ合ったら、一緒に居られないだろう。温和な家族でいられないだろう。(Suda (2005))

- (23) คง ทราบ กัน ดี อยู่ แล้ว (よくご存知の通り、(後略))

(khong sâap kan dii yùu léew)
 知る お互い 良い いる PERF

- (24) ผม ขอเริ่ม เรื่อง เลยนะ ชำนาญ คุณ (phǒm khǎw rûm rûaŋ læy ná channaaan khun)

僕 始まして 事 PART シャムナン 貴方

คง ทราบ ข่าว จาก หนังสือพิมพ์ แล้ว (khong sâap khàaw càak nǎngsǔwphim léew)

存知 ニュース から 新聞 PERF (インモラル)

ではさっそく本題に入らせてもらおうよ。チャムナン君。君も新聞などで知っていると思うが、

- 2) 「発話の締め」: 「発話の締め」は、Suda (2005) の言う closing a conversation であり、話し手が自ら話を終わらせる際に คง(khong)がしばしば用いられる。

- (25) ผม คง มี เท่านั้น (phǒm khong mii thâwnii)

僕 ある これだけ (私の方からはこれだけです。)

上述の「断定回避」、「自話の締め」の2つはいずれも Suda (2005) でも指摘されているものであるが、他にも次のような談話的機能があることを指摘しておきたい。

- 3) 「婉曲的な断り」: คง(khong)を用いることによって判断や主張が控えめになるので、一人称主体の場合は、自分の意図ではなく、何らかの状況によって断らざるをえないというニュアンスが生まれ、「婉曲的な断り」という控えめな断り方としても使われている。

- (26) ผม คง ช่วย ทุกคน ไม่ได้หรอก (phǒm khong chûai thúkkhon mâi dâi ròk)

僕 助ける 全員 NEG できる PART

全員を助けるなんて無理だよ。

(インモラル)

4) 「願望」: คง(khong)が用いられると判断や主張が控えめになるため、(27)のように、話し手が願っていることを表現する際に「望み」として「หวังว่า」に คง(khong)が後続されることが多く見られる。さらに、(28)のように、คง(khong)が用いられると聞き手の感覚・感情を考慮するニュアンスが生じるため、聞き手に対して願いや謝罪を表す場合、「คิด(หวังว่า)」に คง(khong)が後続し、「相手への願望」のストラテジーとしてもよく用いられる。

(27) หวัง ว่า ด้อย คง พบ คุณ มา ใช้ ชีวิต ใหม่

(wǎng wāa tōy khong phóp khun maa chái chiwít mài)

望む と トイ 会う 貴方 来る 使う 人生 新しい

ที่ เยอรมัน อย่าง มี ความสุข (thīi yəəraman yàang mii khwaamsùk)

で ドイツ よう ある 幸せ

あなたがドイツへ来られて幸福な人生に遭遇されることを願っています。 (私は)

(28) กระผม คิด ว่า หลวงพ่อ คง เข้าใจ เจตนาดี ของ กระผม

(kràphǒm khít wāa lūangphôw khong khâwcai jeetanadii khǒng kràphǒm)

わたくし 思う と 本尊 理解 善意 の わたくし

わたくしはご本尊様のご理解をいただけるものと思っております... (蛇)

5. まとめ

本研究では小説の用例の観察を通して推量表現のダロウと คง(khong)の考察を試みた。その結果は次のようにまとめられる。

- คง(khong)が日本語に訳される際、「ダロウ」、「〇」、「と思う」、「考える」の他に、「に違いない」等の認識モダリティの推量や、「たぶん」「きっと」等の確信の度合いを表す副詞が出現する。
- ダロウは最も多く(53%)を占めているが、ダロウが対応しない形式も47%を占めている。そのため、คง(khong)はダロウと同じではないことが明らかになった。
- ダロウには(คง(khong)にない)一人称の制限があり、それが、คง(khong)がダロウに訳されていない要因であると考えられる。
- คง(khong)による談話上の派生的な用法として、「断定回避」、「発話の締め」、「婉曲的な断り」、「願望」の4つが見られる。

注

- (1) 本稿ではダロウとデショウ、デショを等価とみなす。
- (2) 南不二男(1993)は日本語の文構造に4つの段階があるとし、そのうち従属節として現れるのはA類、B類、C類の3種類であるとしている。C類は「が・けれど・から・し」などの接続助詞が該当する。
A類: 彼は、頭をかきながら誤った。

B類：参加希望者が少ないので、その計画は中止された。

C類：いい子だから、ちゃんとお留守番しているのよ。

(3) คง(khong)は「จะ」と共起し、「คง(khong) จะ」という形をとることも多く、本稿では区別しないで扱う。両者の違いについては今後の課題である。

(4) คง(khong)が日本語に訳された際、ダロウやトオモウ等のような形式が見られるのに対し、「∅」は対応する形式のないものを表示するマークである。

参考文献

- 安達太郎 (1991) 「いわゆる『確認要求の疑問表現』について」『日本学報』10、pp45-59
庵功雄 (2009) 「推量の「でしょう」に関する一考察—日本語教育文法の視点から—」『日本語教育』7、日本語教育学会、pp58 - 68
奥田靖雄 (1984) 「おしはかり(一)」『日本語学』3 (2)、明治書院、pp54 - 69
——— (1985) 「おしはかり(二)」『日本語学』4 (2)、明治書院、pp48 - 62
キャアコップチャイ スィラッサナン(2010) 「ダロウの意味・用法—小説における分析—」『日本語／日本語教育研究』1、日本語／日本語教育研究会、pp157-176
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
銅直信子 (2001) 「日本語におけるポライトネスの現われ方. 談話参加者の情報量を中心に」『敬愛大学国際研究』8、pp53-79
日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』くろしお出版
益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
三宅知宏 (2010) 「「推量」と「確認要求」—“ダロウ”をめぐる—」『鶴見大学紀要』47、pp9 - 55

Suda Rangkupan.(2005) A system of Epistemic Modality in Thai, *Manuaya: Journal of Humanities*. 8.1

พรทิพย์ ภักทรนาถ. (2515) ลักษณะમાલાในภาษาไทย. กรุงเทพฯ: โรงพิมพ์มหาวิทยาลัยราชภัฏวชิราวุธวิทยาลัย

พระยาอุปกิตศิลปสาร. (2546) หลักภาษาไทย. กรุงเทพฯ: บริษัท โรงพิมพ์ไทยวัฒนาพานิช จำกัด

用例出典

タイ語の作品

インモラル: 『インモラル・アンリアル』 ウィン・リョウワーリン作 宇戸清治訳 財団法人国際言語文化振興財団 2002

鏡: 『鏡の中を数える』 プラップダー・ユン作 宇戸清治訳 タイフーン・ブックス・ジャパン 2007

蛇: 『蛇』 ウィモン・サイニムヌアン作 桜田育夫訳 株式会社めこん 1992

ヨム: 『ヨム河』 ニコム・ラーヤーワー作 飯島明子訳 段々社 2000

私は: 『私は娼婦じゃない』 パカーマート・プリチャー作 石井美恵子訳 株式会社めこん 1994

日本語の作品

サヨナラ: 『サヨナライツカ』 辻仁成 世界文化社 2001

波: 『波の上の魔術師』 石田衣良 文芸春秋 2001

猛: 『猛スピードで母は』 長嶋有 文芸春秋 2002